

K289
Mo

竊上義光物語

全

①





K289
no.



一某と七代家上七家には終りの義後と若年が家上
 不私りて松根備前守清公儀の捧御仕山宮高太夫御是
 越前守明成守之旨申事と申候御事候御事候御事
 立飛御事及御事候御事候御事候御事候御事候御事
 上使御事申一及仕御事候御事候御事候御事候御事
 申事高太夫御事候御事候御事候御事候御事候御事
 同於御事候御事候御事候御事候御事候御事候御事
 御事候御事候御事候御事候御事候御事候御事候御事
 御事候御事候御事候御事候御事候御事候御事候御事
 御事候御事候御事候御事候御事候御事候御事候御事

表行軍狀一の彼軍の中より其方き後北の事し
 余今後征つ可首一統の思ふよりよき事者なり子孫書之
 義光の家親之通由家母の討一奉り忠誠しんかまより
 且つ其の妻たねが思及事及事の事成書記一子孫を
 形見のせよ一いんかまの河を道行し一河を
 夫と孝心事に秋乃夜の夜をかりたる好く思ひか
 後と書案の子孫の形見の事と詞一
 去るに河を成し此世に人より事あり
 一

義光物語卷上目録

- 一 義守公逝去之事
- 一 城取十部討捕事
- 一 常川公退治之事
- 一 八公城踏巻之事
- 一 天臺城用退之事
- 一 柏木山公戦之事
- 一 満兼生害之事
- 一 北道公能登守勇力之事
- 一 兼山之城用退事

- 一 通原殿藏亡之事
- 一 十五里原公我之事

我守公逝去之事

一 遠具家上の元祖と有り、法和源氏乃屯家、本目梅
 察侍將軍修理太父兼頼公人王九拾九世後光嚴院、延
 文元乙酉申八月六日、本目法家上の郡山形に入道者人王
 一百代後園融院の康暦元乙酉六月八日誓去、其下
 後法家康縁なく、我光乙酉乙亥、利知の、我光乙酉乙亥
 之清時父我守公同道して、清時中、清時父我守公同道
 而、同道持、進者持、可、我具乙酉乙亥、有、我守公同道
 盜賊教中人、法慈名、我守公同道、我守公同道、我守公同道
 一、我光乙酉乙亥、可、我守公同道、我守公同道、我守公同道
 但名教、我守公同道、我守公同道、我守公同道、我守公同道

信長公望日代々清家相傳一後遂乃と自宗
の流大方と取も在孫の稱は大方に一自宗拾七歳
之時よりひのむのむと云き成あり其場と張信
たの大方と云くひのと云及我光を佛と例等日終
則ち多ると張信と云ひはひのむひのむと云光
信長信のむと云張有之師父子相付ひ山形清城
志のひのむの其後人王百七世正親所院天正拾八の三
月申向より義守と買劍乃ん花とそ八月迄と云
たるふれと毎くは洲と云むは信長と云く
十七日七拾歳と云張と云ふ法名と云林と云
と云建立と云ひのむと云信長と云張と云張
る流も大方の利吉と云

城取十高討捕事

一 吉種も其公の御地よりは城取十高と云ふと云り
我光は信長と云ふ信長と云ふ大高と云ふ高と云ふ高と云ふ
主のゆゑ信りと云ふと云ふ信長と云ふ遠の事と云ふ御の御
たも信長と云ふ信長と云ふ信長と云ふ信長と云ふ信長と云ふ
信長信長と云ふ信長と云ふ信長と云ふ信長と云ふ信長と云ふ
志吾流馬と云ふ信長と云ふ信長と云ふ信長と云ふ信長と云ふ
乱ぬる信長と云ふ信長と云ふ信長と云ふ信長と云ふ信長と云ふ
一 信長と云ふ信長と云ふ信長と云ふ信長と云ふ信長と云ふ
信者信者と云ふ信者と云ふ信者と云ふ信者と云ふ信者と云ふ

極子丸を賜ふ事由爲代々宗家妻は法教身有る別家一か
羽子傳は此社より傳へるに集りて十萬石討有申し且は家
氏家尾張守の御定有て尾張守方より十萬石申す事一日以
迄隣不私に御定有て玉の通路に自由をば諸人固爲及り
物更我光先方一私謀以及ぬ念言の松島同くは前後まゝに
買取し而後其女成我光嫡子熊澤大女有合て一言及んた
信中越も然るに十萬石はしやうに思ひ我光其家
を成す中らまらば一敵討成て一母を以尾張守事の
扱中越と毒の我光一私謀加焼成は此隣と一入
勢を大に成らば又其母とら成成謀成有り事一業一も
我光一私私謀言妻河と事一及吉利まのまに傳有通

いふ事一私私謀言妻河と事一及吉利まのまに傳有通
依吉又尾張守のお候志より一義光とら御使者成は我
病室の外より長中名を以敵討玉の授け扱又熊澤大女
初出の尾家より宗家と一御言及言は敵討成りて御所書
小娘一日御書一看し申す事一も言はぬ一縁り成梅澤信
不後討玉成此形一事りん給りて御所書也一外一は家
女子不後御書より書院へ成乾院護摩檀と清り且新
念御所産之治又信一に元お候り申す外御所臨臨御
教書一入一書し御言在事一も言はぬ一十萬石夜御所
用一深かり申す事一も言はぬ一御言在事一も言はぬ一御言在事
一書り扱御所産之治又信一に元お候り申す外御所臨臨御

か半村が為すに不承し美の首を言ふに
海軍の御守の格に海軍の御守の格に
後して海軍の御守の格に海軍の御守の格に
他軍の御守の格に海軍の御守の格に
伏見の御守の格に海軍の御守の格に
出づる御守の格に海軍の御守の格に
たりの御守の格に海軍の御守の格に
ちの御守の格に海軍の御守の格に
成十萬石の御守の格に海軍の御守の格に
そく廣間の御守の格に海軍の御守の格に
討つて御守の格に海軍の御守の格に

惣て御守の格に海軍の御守の格に
志村の御守の格に海軍の御守の格に
意の御守の格に海軍の御守の格に
者たの御守の格に海軍の御守の格に
志村の御守の格に海軍の御守の格に
大剛の御守の格に海軍の御守の格に
志村の御守の格に海軍の御守の格に

一也の御守の格に海軍の御守の格に
この御守の格に海軍の御守の格に
七也の御守の格に海軍の御守の格に
八也の御守の格に海軍の御守の格に

成り合ふ事は成るべき事なりと云ふは
百千の事なりと云ふは成るべき事なり
此れは成るべき事なりと云ふは成る
べき事なりと云ふは成るべき事なり
と云ふは成るべき事なりと云ふは
成るべき事なりと云ふは成るべき
事なりと云ふは成るべき事なり
と云ふは成るべき事なりと云ふは
成るべき事なりと云ふは成るべき
事なりと云ふは成るべき事なり

外は如く指す事なりと云ふは成る
べき事なりと云ふは成るべき事
なりと云ふは成るべき事なりと
云ふは成るべき事なりと云ふは
成るべき事なりと云ふは成るべき
事なりと云ふは成るべき事なり
と云ふは成るべき事なりと云ふは
成るべき事なりと云ふは成るべき
事なりと云ふは成るべき事なり
と云ふは成るべき事なりと云ふは
成るべき事なりと云ふは成るべき
事なりと云ふは成るべき事なり

天堂之採用記事

一 伝説の成るべき事なりと云ふは
成るべき事なりと云ふは成るべき
事なりと云ふは成るべき事なり
と云ふは成るべき事なりと云ふは
成るべき事なりと云ふは成るべき
事なりと云ふは成るべき事なり
と云ふは成るべき事なりと云ふは
成るべき事なりと云ふは成るべき
事なりと云ふは成るべき事なり

1
Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a single column and appears to be a personal or official communication. The ink is dark and the paper shows signs of age.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a single column and appears to be a personal or official communication. The ink is dark and the paper shows signs of age.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a salutation and continues with several lines of text, ending with a signature and a date. The handwriting is fluid and characteristic of the 18th or 19th century.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a salutation and continues with several lines of text, ending with a signature and a date. The handwriting is fluid and characteristic of the 18th or 19th century.

以事之... 日本... 倍の... 柏木...

柏木比合戦之事

一、... 二、... 三、... 四、... 五、... 六、... 七、... 八、...

一、... 二、... 三、... 四、... 五、... 六、... 七、... 八、... 九、... 十、...

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
一百、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
一百、

今くしては、
宗心松権の事を、
多勢に結ぶ、
為城せんの事、
申言ふ事、
内務部事、
之を及支金、
及く致し中、
討交ら合、
俄に没公、
家の蔵に

單其養を、
信て満東、
放て申、
同出資、
之を及支、
事也又、
之を及支、
志也又、
大なる

此下... (The text on this page is written in a highly stylized, cursive Japanese calligraphic style, likely a form of 'sōsho' or 'kyōka' used in the Edo period. It consists of approximately 18 vertical columns of text, starting from the right side of the page and moving towards the left. The characters are dense and fluid, characteristic of the 'kyōka' style. The text is written on aged, slightly yellowed paper with a visible vertical crease down the center, suggesting it was part of a bound volume. The overall appearance is that of a historical manuscript or a page from a book of poetry or prose.)

一昔... (This page continues the text from the previous page, also written in the same highly stylized cursive calligraphic style. It contains approximately 18 vertical columns of text, starting from the right side and moving left. The handwriting is consistent with the previous page, showing a high level of skill and fluidity. The paper shows signs of age and wear, with some discoloration and a central crease. The text is dense and fills most of the page area.)

既にして十の身の上を知らずしては世にあらざるなり
今情は恨みもなきにこそしるべきにぞ思ふ
別業の善縁もなきにこそしるべきにぞ思ふ
又して改めし功徳人の徳業もなきにこそしるべきにぞ思ふ
は清く我の徳もなきにこそしるべきにぞ思ふ
此の世に我の徳もなきにこそしるべきにぞ思ふ
この世に我の徳もなきにこそしるべきにぞ思ふ
またして改めし功徳人の徳業もなきにこそしるべきにぞ思ふ
は清く我の徳もなきにこそしるべきにぞ思ふ
此の世に我の徳もなきにこそしるべきにぞ思ふ
この世に我の徳もなきにこそしるべきにぞ思ふ

考へてしるべきにこそしるべきにぞ思ふ
善縁の者一人もなきにこそしるべきにぞ思ふ
悪縁の者一人もなきにこそしるべきにぞ思ふ
年志の善縁もなきにこそしるべきにぞ思ふ
道平の善縁もなきにこそしるべきにぞ思ふ
清く我の徳もなきにこそしるべきにぞ思ふ
有るは善縁もなきにこそしるべきにぞ思ふ
中勢の善縁もなきにこそしるべきにぞ思ふ
終業の善縁もなきにこそしるべきにぞ思ふ
厚く我の徳もなきにこそしるべきにぞ思ふ

取らたてはるるに事ありしに
武重成の事ありしに大坂の
路中よりいふるに武重成の
年が事ありしに武重成の
事ありしに武重成の事あり
かきり中事ありしに武重
く事ありしに武重成の事
其後武重成の事ありしに
事ありしに武重成の事あり
之れを武重成の事ありしに
取らたてはるるに事ありしに

之れを武重成の事ありしに
武重成の事ありしに武重成
安成の事ありしに武重成の
中事ありしに武重成の事
は事ありしに武重成の事
近江の事ありしに武重成の
類事ありしに武重成の事
教事ありしに武重成の事
事ありしに武重成の事あり
本事ありしに武重成の事
と助事ありしに武重成の事

形を以て守るに備へざるは、
味方(味方)も亦た守るに備へざるは、
押寄りの強さたるは、
此の強さたるは、
かの口(口)の如く、
一軍(一軍)の如く、
同各(同各)の如く、
かま(かま)の如く、
文(文)の如く、
書(書)の如く、
おま(おま)の如く、

恒(恒)の如く、
不(不)強(不強)の如く、
軍(軍)と(軍)と、
と(と)お(お)入(入)る(る)中(中)に(に)西(西)を(を)取(取)る(る)は(は)、
お(お)の(の)後(後)光(光)たる(たる)は(は)、
得(得)る(る)は(は)強(強)さ(さ)る(る)は(は)、
備(備)へ(へ)る(る)は(は)強(強)さ(さ)る(る)は(は)、
煙(煙)天(天)の(の)如(如)く、
い(い)の(の)如(如)く、
子(子)大(大)女(女)の(の)如(如)く、
今(今)の(の)如(如)く、

かゝるにふてたゞの責をいふはたかたか言ふ事なり
またおとせしむるはたかたか言ふ事なり
城守の女をいふはたかたか言ふ事なり
橋守の口をいふはたかたか言ふ事なり
家守の口をいふはたかたか言ふ事なり
村守の口をいふはたかたか言ふ事なり
いふ事及び罪状をいふはたかたか言ふ事なり
諸人の口をいふはたかたか言ふ事なり
町守の口をいふはたかたか言ふ事なり
さうはたかたか言ふ事なり
かゝるにふてたゞの責をいふはたかたか言ふ事なり

まゝの口をいふはたかたか言ふ事なり
松守の口をいふはたかたか言ふ事なり
有るはたかたか言ふ事なり
いふ事及び罪状をいふはたかたか言ふ事なり
村守の口をいふはたかたか言ふ事なり
さうはたかたか言ふ事なり
かゝるにふてたゞの責をいふはたかたか言ふ事なり

年を記すは心すむるに我光の道徳の如く徳徳中と
女書初と先ん立腕の月也概との傷教乃沛と越りり
道徳の一様大書徳人の如く始記して後との如く
心で新擊以上と青木事つまきは以ての如く若木の
と若木の事と書教と追拂とんせ人の教札の如く
書初一人の如く書初は也に或る事等と人
足平の如くは也に道徳の成る如く我分事
志しての成して後事と人等と人等と後事
と若木の事と書初は也に或る事等と人
若木の事と書初は也に或る事等と人
如く道徳の如く是れ一様とて成る事也

是れは心すむるに我光の道徳の如く徳徳中と
女書初と先ん立腕の月也概との傷教乃沛と越りり
道徳の一様大書徳人の如く始記して後との如く
心で新擊以上と青木事つまきは以ての如く若木の
と若木の事と書教と追拂とんせ人の教札の如く
書初一人の如く書初は也に或る事等と人
足平の如くは也に道徳の成る如く我分事
志しての成して後事と人等と人等と後事
と若木の事と書初は也に或る事等と人
若木の事と書初は也に或る事等と人
如く道徳の如く是れ一様とて成る事也

義光公物語卷下目錄

一 從上杉宗勝公使者之事

一 家康公與列御進齋之事

一 近國諸將為加勢山形馳集事

一 畑屋落城之事

一 上山公戰之事

一 仙臺正宗公加勢之事

一 長谷堂公戰之事

一 會津勢引退之事

一 下河邊政之之事

一 在內退治之事

一 修葺大文及生害之事

一 於天臺原馬梳之事

一 義光公逝去之事

一 寂上諸侍公の高人事

一 從上秋宗勝公使者之事

一 豊后大園秀次公の世の後の河津宗浦公全被逐

上秋宗公宗勝公の事より事河津宗浦公全被逐

地下墓の講述は諸公の事より事河津宗浦公全被逐

及秀光公の守ち奉らる事より事河津宗浦公全被逐

公の事より事河津宗浦公全被逐

入魂公の事より事河津宗浦公全被逐

引共外古墳事より事河津宗浦公全被逐

事より事河津宗浦公全被逐

事より事河津宗浦公全被逐

事より事河津宗浦公全被逐

事より事河津宗浦公全被逐

今此勅を信し奉り義光を身爲し世々一子一人を以て
此道は世々重んじ留め置てし既ら此の道も此の道は世
昔も守り奉り世々此の道に守り奉り義光を以て
此の道は今及ぶるものなり此の道は世々此の道に
此の道も守り奉り世々此の道に守り奉り義光を以て
此の道は世々重んじ留め置てし既ら此の道も此の道は世
昔も守り奉り世々此の道に守り奉り義光を以て
此の道は今及ぶるものなり此の道は世々此の道に
此の道も守り奉り世々此の道に守り奉り義光を以て

義光之秘蔵を以て此の道は世々重んじ留め置てし既ら
此の道は世々重んじ留め置てし既ら此の道も此の道は世
昔も守り奉り世々此の道に守り奉り義光を以て
此の道は今及ぶるものなり此の道は世々此の道に
此の道も守り奉り世々此の道に守り奉り義光を以て
此の道は世々重んじ留め置てし既ら此の道も此の道は世
昔も守り奉り世々此の道に守り奉り義光を以て
此の道は今及ぶるものなり此の道は世々此の道に
此の道も守り奉り世々此の道に守り奉り義光を以て
此の道は世々重んじ留め置てし既ら此の道も此の道は世
昔も守り奉り世々此の道に守り奉り義光を以て
此の道は今及ぶるものなり此の道は世々此の道に
此の道も守り奉り世々此の道に守り奉り義光を以て

其酒の諸將及一昧既は伏見大坂の城(本城)なり也
甲馬七月廿五日、映山出でて橋の齒(くは)の如く固まらば、
以て大坂宰相の家康を成山殿の將、我光の政は守備、宰相秀康
政はも殘兵の家康の秀忠と以上言ふ(格)國流の諸將
一のまゝして同九月の如く、此の如くは成山殿の諸將なり
同の城に入りて居り

近世之諸將乃加勢山城の馳集事

一 去程の家康公の京師下り御書七月十三日、成山殿
諸將なるも、此の事も御書成山殿の旨に應ずる御書
甚し道重乃法乃加勢として山城(我越)松(山)中あり
守り向不口、此集(成山)軍儀と讀み、此を身合軍儀

か礼人の政家康公の諸將の押付(出進)致す有之と云はれり
我光公の御書にお侍軍評定と云ふ會津(礼)令と云ひて、
是道重の信より去程(道重)の諸將お侍の山城(馳集)の信を
是別(守)りらるるに、南(成山)諸將守りる人、秋田(美濃)城(口)より
指人の政家公の御書、或も我光公も御書、或も昔人の御書、
是は御書、或も昔人の御書、或も昔人の御書、
内(越前)の諸將、或も昔人の御書、或も昔人の御書、
一可(集)の軍評定は、是の如く、一昧(同)の御書、
我光公の御書、或も昔人の御書、或も昔人の御書、
乃(是)の御書、或も昔人の御書、或も昔人の御書、
是(此)の御書、或も昔人の御書、或も昔人の御書、

我之形が玉の甲(押入用道)は今もは徳川氏に在り
公成し味方唯運せし成ありしに有るは各公成
を二名中言ふ年して神威一変して年久の我光の甲成
こゝに惟徳文名をたふす百余人と申すは其外の諸藩
今も二〇七〇〇は捨けし南の諸藩年々成ありしに照る
お申すは此形は是に時取入りのか海軍の甲成
海軍備全級逆國あり諸大名之儀是に絶つては其の城攻
取守の効康の法は子と奥列乱逆成捨けしに道は是に
有諸勢は時々の格の齒成別如く告事は其の海軍大に
し格諸事より格絶せしは其の格も一檢り事本事
事成ししに同之甲成格絶は是に有るは元わ成

光二一方者の甲成及事成ししに諸藩は併成ありしに
徳川氏に依り守りしは其の甲成守りしに中成ありしに
我光の甲成は其の甲成加勢は是に格絶の告事ありしに
西之甲成(一)は其の甲成格絶は是に有るは社成別
是れ其の甲成は是の甲成起格文成被りしに格絶の告事
奉射の康の甲成不成之儀は是に格絶の告事ありしに
追掛の甲成は是の甲成お申すは是の甲成格絶の告事ありしに
各中分甲成は是の甲成追掛の甲成は是の甲成同土軍本事ありしに
格絶の甲成は是の甲成お申すは是の甲成格絶の告事ありしに
是れ其の甲成は是の甲成お申すは是の甲成格絶の告事ありしに
是れ其の甲成は是の甲成お申すは是の甲成格絶の告事ありしに

其のつらき同子三子傳りて我も本と云ひは通つて道りり
其母幸々善所神身其母撫つてふ後死をも有る亦指標と
後死人如くいせせ中継と信しつるもその後死のよきおま
きり結つていせ志惟子由惟子文と云く木の枝は結守たり
りもまじりて其外女善所と云ふ人後死をも有る其母
いせいのまじりて其母のつらき大焼結つる標に母(いせの
と三子傳りて其母の傳りの儀は神妙なりて其母は結つるま
煙石首標之事

一 其母のつらき同子三子傳りて我も本と云ひは通つて道りり
其母幸々善所神身其母撫つてふ後死をも有る亦指標と
後死人如くいせせ中継と信しつるもその後死のよきおま
きり結つていせ志惟子由惟子文と云く木の枝は結守たり
りもまじりて其外女善所と云ふ人後死をも有る其母
いせいのまじりて其母のつらき大焼結つる標に母(いせの
と三子傳りて其母の傳りの儀は神妙なりて其母は結つるま
煙石首標之事

一 其母のつらき同子三子傳りて我も本と云ひは通つて道りり
其母幸々善所神身其母撫つてふ後死をも有る亦指標と
後死人如くいせせ中継と信しつるもその後死のよきおま
きり結つていせ志惟子由惟子文と云く木の枝は結守たり
りもまじりて其外女善所と云ふ人後死をも有る其母
いせいのまじりて其母のつらき大焼結つる標に母(いせの
と三子傳りて其母の傳りの儀は神妙なりて其母は結つるま
煙石首標之事

挙にあらんかむとて、
勢に倅易きて、
討より負死、
山城守を攻むるに、
可強絶滅せしむる城、
指浩了、
明く今、
つら、
取廻し、
又、
い、

志、
さ、
形、
斗、
勝、
城、
者、
た、
い、
男、
山、

版目指し守りて成りしよりも多相お獲せし可く申す所なり
後人とはりてはまじりて我の法は強て守りてしるもあは
幣の海に討つておちりし中いれ我の三四回ほどつきた
歎たつたおちりし中いれ我の三四回ほどつきた
世の法は強て守りて成りしよりも多相お獲せし可く申す所なり
討せし何の事も有てし及人の我を討せし我
世の法は強て守りて成りしよりも多相お獲せし可く申す所なり
先づ有てはし追ひてしる中(抑々十文字お取り
けり我拂て余はあり救り變化して今成(塵芥)か
し追ひてしる中いれ我の法は強て守りて成りしよりも多相お獲せし可く申す所なり
追ひてしる中いれ我の法は強て守りて成りしよりも多相お獲せし可く申す所なり

正宗の加勢之事

一 去程の如き御書は御書に申す所あり右様は御書に
る神は我光の御書にて力に身なきは仙者の御書にて
成程の御書に申す所あり右様は御書に申す所あり
御書に申す所あり右様は御書に申す所あり
御書に申す所あり右様は御書に申す所あり
御書に申す所あり右様は御書に申す所あり

而右て立入りたるは及ぶ宗の加護は終り会威と有り
不那にて申申者た力法の守りの中事とありあ
力会に終りたるは及ぶ宗の加護は終り会威と有り
成法にて申申者た力法の守りの中事とありあ
宗の加護は終りたるは及ぶ宗の加護は終り会威と有り
長谷堂合威之事

一 志願の城守は九月十日の如く物命の城と成り一勝をきて軍
兵は二三日分りて申申者た力法の守りの中事とありあ
堂の志願村は十月十日の如く物命の城と成り一勝をきて軍
兵は二三日分りて申申者た力法の守りの中事とありあ
長谷堂の押す指一町分りて申申者た力法の守りの中事とありあ

田舎の尾流は及ぶ宗の加護は終り会威と有り
この城の中は及ぶ宗の加護は終り会威と有り
衆の中合せたるは及ぶ宗の加護は終り会威と有り
志願の城守は十月十日の如く物命の城と成り一勝をきて軍
兵は二三日分りて申申者た力法の守りの中事とありあ
春日の如く申申者た力法の守りの中事とありあ
志願の城守は十月十日の如く物命の城と成り一勝をきて軍
兵は二三日分りて申申者た力法の守りの中事とありあ
春日の如く申申者た力法の守りの中事とありあ
志願の城守は十月十日の如く物命の城と成り一勝をきて軍
兵は二三日分りて申申者た力法の守りの中事とありあ

入色はれは夜限の如く慶の我のたかりきり甚夜城
中其勢の八人討死志りく志強の教長谷臺より落りし由先
之をうと触延城守守はまていりて其の内も其勢討城を
加勢大まははらへし一軍をさかんと其内は其勢討城を
さし討陣をいり力以合諸軍は延守の由取おはるる日暮
中守如く城中は勢を人と相ひひらひのまへにさし討城を
さし討陣をいりし其勢を(以合諸軍)討城し佛言の趣
妻く中守はりきりし其勢の由取軍は念のよひ十
日の春日を奪ひし時て勢をめて攻めしり其勢を城中に
少し討城をさし討陣をいりし其勢を(以合諸軍)討城し佛言の趣
掛守の稀勢の勢をいりし其勢を(以合諸軍)討城し佛言の趣

一に討城の討陣の如く負死人數百人及び其勢は城を
中其勢をいりし其勢を(以合諸軍)討城し佛言の趣
討捕の由告事城中大なる力以得る者大に松敵の上の敵
軍に力以得る一應病神の勢をいりし其勢を(以合諸軍)討城し佛言の趣
又道にけきりし其勢を(以合諸軍)討城し佛言の趣
城堅固の如く敵口と強きと我先の強きと其勢を(以合諸軍)討城し佛言の趣
内外の如く敵は其勢を(以合諸軍)討城し佛言の趣
おて事守文の如く其勢を(以合諸軍)討城し佛言の趣
及たりの如く其勢を(以合諸軍)討城し佛言の趣
其勢を(以合諸軍)討城し佛言の趣
其勢を(以合諸軍)討城し佛言の趣
其勢を(以合諸軍)討城し佛言の趣

七のいづれかて言授り流絶一方は御旗の先遣り
 忠告將基は城一城より如く三指拵斗をらへし
 手はは海津をい御書一して道々おぼへし御
 足指共い下がへり行く入るるの事い
 て中の跡(三)一守守子

上山合致之事

一上山の里身越後守五城せりした城の諸軍奉
 後統御手い其身より取(おぼ)ち子は取^れえり多
 敷多指拵一せりの其外加勢一は苦別志無^る由
 の心入る余人の率とて指拵一は九月十七日
 先跡村造尾出井海津をぬ敷の跡におぼし村一

城より陣をかくし陣より上取ま水と邊の事い
 ありぬい海(と)ち若海津の勢と有きり追拂り
 きのり陣中勢をいをいおて本軍内を者大成
 さい難い追迹おも首をてちん^て男み道い
 きりせり首陣せん事かち敷は道の内い
 足は今率余におて本軍入るせり
 忠告者たをい守守とく氏部守道みおて中松敷
 船の長途といも成敵来一事と本軍は
 下は若尾の跡をい福書一は忠告者い
 其上陣の張拵といは御旗一てん
 取拵り致は勝利とい事と右と中守り

はくしやまをさうし知ら格せの定乃勝成女をさしおあうく
さし或る將の隠志ありこと既お打ておささ志乃加勝
い来一書前志をさし向ては身志を因ら治て物成る
以或すならん其の縁成しおげ治ら教治を有切き計り
一は治るをいひし書前志のさしなきる治る一は治る治る縁
前陣より合せん地事の治る治る治る治る治る治る治る
樞ぬおの討治すやち終らは成を治る治る治る治る治る
足り強盛成者三百人ものさ因治る治る治る治る治る
志同志のさ大将務村邊の治る治る治る治る治る治る治る
さり地乃利治し治る治る治る治る治る治る治る治る治る
取事て加勝治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る

河内河東志事有治る治る治る治る治る治る治る治る治る
於貴治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る
い城也他の治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る
掛らんとて食治すりて成る治る治る治る治る治る治る治る
大治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る
乃者治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る
或る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る
あま治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る
掛る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る
枯木治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る
て治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る治る

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 15 lines of text, starting with a large initial letter 'N'. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. It consists of approximately 15 lines of text, starting with a large initial letter 'N'. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a long horizontal line, possibly a signature or a decorative flourish. The main body of text consists of several lines of dense, flowing characters. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key. There are some red markings or characters interspersed within the text, possibly indicating specific names or titles. The overall appearance is that of a well-preserved but somewhat obscure historical manuscript.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a long horizontal line, possibly a signature or a decorative flourish. The main body of text consists of several lines of dense, flowing characters. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key. There are some red markings or characters interspersed within the text, possibly indicating specific names or titles. The overall appearance is that of a well-preserved but somewhat obscure historical manuscript.

義光の世に於て... (Vertical text in cursive style, starting from the top right of the page)

流竊せし... (Vertical text in cursive style, starting from the top left of the page)

妻の如く及ぶ事ありては、
可なり。此の如く、
合年が妻の如く、
先代母の如く、
一歳の子を、
他人の諸軍の如く、
老人の如く、
成の如く、
中代の子の如く、

右の如く、
伊豆守の如く、
城の如く、
あつきの如く、
の一方の如く、
可論の如く、
信の如く、
病の如く、
収ての如く、
下代の如く、
余の如く、

いふにたゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
居て、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
下は、従つて、大いに驚かむ。率に
大捕を、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
日、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
の、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
人の、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
不、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
向、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
成、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
從、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
從、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に

控、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
百、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
給、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
取、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
給、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
さ、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
先、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
臨、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
乃、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
好、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に
看、たゞしむる者も、大いに驚かむ。率に

戦国時局の事... (武蔵の事) ... 武蔵の事... (武蔵の事) ...
武蔵の事... (武蔵の事) ... 武蔵の事... (武蔵の事) ...
武蔵の事... (武蔵の事) ... 武蔵の事... (武蔵の事) ...
武蔵の事... (武蔵の事) ... 武蔵の事... (武蔵の事) ...
武蔵の事... (武蔵の事) ... 武蔵の事... (武蔵の事) ...

武蔵の事...

武蔵の事... (武蔵の事) ... 武蔵の事... (武蔵の事) ...
武蔵の事... (武蔵の事) ... 武蔵の事... (武蔵の事) ...
武蔵の事... (武蔵の事) ... 武蔵の事... (武蔵の事) ...
武蔵の事... (武蔵の事) ... 武蔵の事... (武蔵の事) ...
武蔵の事... (武蔵の事) ... 武蔵の事... (武蔵の事) ...

武蔵の事... (武蔵の事) ... 武蔵の事... (武蔵の事) ...
武蔵の事... (武蔵の事) ... 武蔵の事... (武蔵の事) ...
武蔵の事... (武蔵の事) ... 武蔵の事... (武蔵の事) ...
武蔵の事... (武蔵の事) ... 武蔵の事... (武蔵の事) ...
武蔵の事... (武蔵の事) ... 武蔵の事... (武蔵の事) ...

Handwritten text in a cursive script, likely a list or record of names and titles. The text is written vertically from right to left. Some characters are written in red ink, possibly indicating specific names or titles of importance.

Handwritten text in a cursive script, continuing the list or record. The characters are dense and fluid, typical of historical Japanese calligraphy.

宿上諸將のりきり之事

- 一 貳万七千名 清水大亮大史友
- 一 貳万名 大内内膳少友
- 一 貳万九千二百名 上田内膳大史友
- 一 二万六千名 楠長守少友
- 一 一萬五千名 高橋兼光少友

一三万石
 一三万石
 一三万七千石
 一三万七千石
 一三万石
 一三万九千三百石
 一三万三千石
 一三万石
 一三万石

志村伊豆守
 坂上纯伊守
 里人氏初少
 氏家左近
 下 野守 伊守
 東海守
 東根伊守
 越前守
 根根伊守
 伊守

一八千石
 一八千石
 一七千石
 一七千石
 一七千石
 一七千石
 一八千石
 一八千石
 一八千石
 一八千石

小國日向守
 中山玄春
 新美因幡守
 伊守
 永德或守
 阪田播磨守
 成徳道守
 安金方守
 伊守
 奥村守

高橋守

一 一丈千石
一 三丈千石
一 三丈千石
一 三丈千石
一 一丈千石
一 一丈千石
一 一丈千石
一 一丈千石
一 一丈千石
一 一丈千石

山本掃部守
日守將監
同 真満
太保長島
進長島守
寺指道守
少桑村守
眞市正
和日越守
眞之次
神保臨守

一 一丈千石
一 一丈千石
一 一丈千石
一 一丈千石
一 一丈千石
一 一丈千石
一 一丈千石
一 一丈千石
一 一丈千石
一 一丈千石

長尾吉満
約家源守
長尾長満
浪米守
伊豆守
志村守
中山守
日守守
日守守
日守守
日守守

一 千石
一 千石
一 千石
一 千石
一 千石
一 千石
一 千石
一 千石
一 千石
一 千石

和山九尾山
情回情勝守
横田大寺
里夏抄部
武久衣衣求
寺精細守守
深木法蓮
小園伴守
生守廿七
申守廿七守
石地河内守

一 却千石
一 却千石
一 却千石
一 却千石
一 却千石
一 却千石
一 却千石
一 却千石
一 却千石
一 却千石

小陳江守
生守廿七
之奔廿七
原公守
并三牛之守
下 守守
下 守守
女二

後の
後の
失白湯皮
大守廿七

一千名

大出度 成以 惠 德 所

一千名

中 原 大 德

一千三百名

山 崎 德 友

一千二百名

昭 坂 方 道

一千二百名

市 藏 德 友

一千名

指 尾 主 水

一千名

石 屋 德 友

一千名

滋 谷 德 友

一千二百名

德 友 德 友

一千名

大 塚 德 友

一千名

新 井 德 友

一千八百名

坂 崎 德 友

右千石以下に諸君の御名を記すに千石は成徳友の御名

共々千石の御名を記すに千石は成徳友の御名

と云ふ御名を記すに千石は成徳友の御名

と云ふ御名を記すに千石は成徳友の御名

と云ふ御名を記すに千石は成徳友の御名

と云ふ御名を記すに千石は成徳友の御名

と云ふ御名を記すに千石は成徳友の御名

と云ふ御名を記すに千石は成徳友の御名

と云ふ御名を記すに千石は成徳友の御名

と云ふ御名を記すに千石は成徳友の御名

後の人々持てて人々を以て其の如く
と云ふは其の書の内容の如く其の如く
其の書の内容の如く其の如く其の如く
其の書の内容の如く其の如く其の如く
其の書の内容の如く其の如く其の如く
其の書の内容の如く其の如く其の如く

入

68648

27097

